

教育研究業績書

2019年5月1日

氏名 小泉 誠 印

研究分野	研究内容のキーワード
臨床心理学	ナラティブ、心理療法プロセス、児童思春期

教育上の能力に関する事項

事 項	年 月 日	概 要
1. 教育方法の実践例		
2. 作成した教科書、教材	2017年4月30日	人生の学びにつなげる家族心理学 土肥伊都子(編) 4章3節 「育児ストレス」 ・事例学習 (pp.82 - 85 ・ p.107) 執筆担当。
3. 教育上の能力に関する大学等の評価		
4. 実務の経験を有する者についての特記事項		
5. その他		

職務上の実績に関する事項

事 項	年 月 日	概 要
1. 資格、免許		
2. 特許等		
3. 実務の経験を有する者についての特記事項		
4. その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書)				
(学術論文)				
1.重度の身体障害を持った男性との心理面接過程	単著	2013年3月	神戸大学大学院人間発達環境学研究科発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要第3巻 pp.16-23	呼吸器官に重度の障害を負った中年男性に対して行なった心理療法事例。障害の契機となった職場への被害妄想的な訴えを繰り返す中で、面接場面で「話をちゃんと聴いていない」セラピストに対して怒りを向ける。怒りを契機にクライアントにとって面接空間が安全／安心を確保できなくなると、「先生の目が怖い」と訴え、中断となった。クライアントの抱える障害とやり場のない怒りを心理療法場面でどのように受け止めるのかを考察している。
2.ひきこもりの不登校 中学3年生男児との訪問面接過程Ⅱ—本人との継続的な面接が難しいケースへの対応—	単著	2012年3月	神戸大学大学院人間発達環境学研究科発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要第2巻 pp.29-39	小泉(2011)の訪問面接の事例研究は、週一回本人と面接し、面接関係を形成していった事例である。しかし実際の訪問面接では、本人に毎回会えるとは必ずしも限らない。本研究では訪問面接に対して抵抗を感じ、定期的な面接ができなかった事例を挙げ、クライアントに対する接し方の留意点やクライアントの母親を支える重要性について述べた。
3.ひきこもりの不登校 中学3年生男児との訪問面接過程	単著	2011年3月	神戸大学大学院人間発達環境学研究科発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要第1巻 pp.37-44	ひきこもりの心理支援では、クライアント来談型の心理面接のみでは対応は不十分であり、訪問型の心理面接などアウトリーチ支援が求められる。本研究では、中学生の不登校引きこもりの事例を提示し、通常のカウンセリングとは異なる流動的で不安定な特徴を持つ訪問面接のプロセス及び面接構造を考察した。
4.試行カウンセリング	共著	2011年3月	神戸大学発達・臨	全編編集執筆を担当。本研究は、クライアントとセラピストによる語りの共同生成過程をナラティブ・

<p>9 事例におけるナラティブ・プロセス— Narrative Process Coding System を用いた検討—</p> <p>5.自分を語ることが難しい思春期男児との心理面接過程</p> <p>6.短期心理面接場面におけるナラティブ・プロセスの検討 (修士論文)</p>	<p>単著</p> <p>単著</p>	<p>2010年3月</p> <p>2009年3月</p>	<p>床心理学研究第10巻 (査読有) pp.41-48</p> <p>心理教育相談事例研究第8巻 pp.17-24</p> <p>広島大学大学院</p>	<p>プロセスとし、試行カウンセリング場面におけるその構造を検討した。結果、ナラティブの量的な変化が示され、面接の進行に伴い、一つの話題に詳細に取り組むようになるという臨床感覚を支持する結果となった。またナラティブ・プロセスは面接の進行とともに、外的事象の語りが減少し、内省の語りが増加することが示された。(共著者;小泉誠・岡本祐子・森岡正芳)</p> <p>思春期の子どもは自身の体験や内面を面接の場面で表現することが難しいことが多い。本事例のクライアントも面接場面での緊張感が高く、当初は自発的な語りはほとんどなかった。しかし、治療的なテーマとは異なる彼の興味関心を話題に取り上げたことで、クライアントは自身の体験を少しずつ表現していった。本事例を基に、臨床における思春期のクライアントの語りの特徴とセラピストとしての聴き方を考察した。</p> <p>本研究は、クライアントとセラピストによる語りの協同生成過程をナラティブ・プロセスとし、短期心理面接場面におけるその構造を検討することを目的とした。心理面接は、非臨床群の大学生9名に筆者が1回50分を10回行った。面接記録を外的、内的、内省的の3つの語りにコード化する Angus et al.(1999)の Narrative Process Coding System に基づき分析し、ナラティブ・プロセスの量的・質的な変化について考察した。(全頁数76頁)</p>
<p>(その他)</p> <p>親と子の語りが重なり合うプロセス— スクールカウンセリングにおける同一セラピストによる親子並行面接事例を通して—</p> <p>1.共同生成という視点から見た妄想と現実— -精神病圏のクライアントの心理療法事例を基に—</p> <p>2.不適応行動がみられる児童擁護施設入所児童への集団療法その4— 特色あるグループへの実施とその課題</p>	<p>単著</p> <p>単著</p> <p>共著</p>	<p>2018年9月</p> <p>2017年9月</p> <p>2014年10月</p>	<p>日本心理臨床学会第37回大会 (於神戸国際会議場)</p> <p>日本人間性心理学会第36回大会 (於東海学園大学)</p> <p>日本心理臨床学会第34回秋季大会 (於神戸国際会議場)</p>	<p>同一セラピストによる親子面接には、親子双方の感情を理解し、その関係性を直接的に把握することができる利点がある(小俣, 2006)。本研究では、発表者がスクールカウンセラーとして出会った親子の面接過程を提示した。親子面接を同一セラピストがする場合、留意点を要する点や両者の感情や関係性だけでなく、語りの形式や構造に着目することで両者のセラピーにおける意味生成が促進されることを考察した。(全頁数1頁)</p> <p>本研究では慢性期の統合失調症の事例を提示し、その妄想・幻覚状態などの病理的体験をセラピストがクライアントともにとどのように扱うのかを検討した。共同生成という観点からナラティブのプロットを把握するための関わり合いの重要性が示唆された。また圧倒的な病理体験の前で、ThとClはその構造に留まり、治療場面に生き残るための関わり合いが考察された。(全頁数2頁)</p> <p>「男子グループワーク」の方法、考察の執筆、および発表を担当。継続的に報告してきた施設内グループセラピーの実践例について、継時的な観点から5年間のプロセスを提示し、その治療的な効果と今後の課題について考察した。特に男子グループでは、居室内での暴力行為が問題になり、怒りの表出について課題とされていた。4年間通して行なわれた怒りをアサーティブに表出するトレーニングの結果、男児の中で自身の行動の振り返りだけではなく、「大人に話す」「その場から離れる」といった解決策を自ら見出す力を養う結果が得られた。(共著者;中植満美子・小泉誠・本田浩子) (全頁数1頁)</p>

<p>3.大学生女性への心理療法のナラティブ・プロセス -10回の短期面接データの質的分析-</p>	<p>単著</p>	<p>2014年8月</p>	<p>日本質的心理学会 第11回大会(於松山大学)</p>	<p>小泉・岡本・森岡(2011)で試行カウンセリング9事例のうち最も内的、内省的な語り豊かな事例、実際の心理療法場面に近い事例を取り上げ、10回分すべてを面接記録にNPCS(Angus et al, 1999)を用いたコーディングを行った。さらに、その心理療法プロセスを質的に分析した結果、大学4年生の進路の岐路に立っているクライアントの母親への依存と自立の葛藤という内容の分析とともに、内的、内省のモードがどのような形式、構造で生じるのかをクライアントとセラピストの共同生成の観点から考察した。(全頁数1頁)</p>
<p>4.不適応行動がみられる児童擁護施設入所児童への集団療法その3-施設内での集団療法実施に求められる要因とその課題</p>	<p>共著</p>	<p>2013年8月</p>	<p>日本心理臨床学会 第32回秋季大会 (於パシフィコ横浜)</p>	<p>「男子グループワーク」の方法、考察の執筆、および発表を担当。児童福祉領域でのグループセラピーの事例について継続的な支援の在り方について発表している。本研究の小学生男児グループでは、性暴力を特に取り上げている。この時期、男児メンバーに性暴力被害があり、その体験から低学年児童に連鎖的に性暴力加害が懸念された。このため、その心理的ケアと並行して、予防的な性問題の心理教育をワークアレンジとして導入した(共著者;中植満美子・小泉誠・本田浩子)(全頁数1頁)</p>